

ロシアはどこに進むのか？

岩尾 大史

国際協力銀行
モスクワ駐在員事務所
首席駐在員（2010年4月より現職）



近代化か、周縁化か

「彼ら（ロシア指導部）はピョートル（大帝）たらんとしながら、ゴルバチョフのような末路をたどることを恐れ、さしあたってはブレジネフのようにふるまっている」。

これからのロシアが進むべき道が議論されるに際し、本書は、今後、たたき台として取り上げられる本となるだろう。すでに、新聞等でも本書の文章の一節がしばしば取り上げられている。冒頭のフレーズは、「終章 ユーラシアの新しい物語」の中の「ロシアの行方——近代化か、周縁化か」の中で出てくるフレーズであり、ロシア指導部が大国の復活を目指して近代化を進めようとするが、思うように成果をあげることができず、真剣に状況を変化させようと働きかけて、コントロール、権力、既得権益を失うリスクを背負うことに踏み出せず、汚職、法の支配の欠如、官僚の恣意性の横行の中で停滞している様子を表現したものである。本書の中で、小生が最も共鳴を覚えたフレーズである。



ピョートル大帝が建造した庭園ペテルゴーフのサムソン像
(サンクトペテルブルク)



血の上の教会。1881年に皇帝が暗殺された場所に建造された
(サンクトペテルブルク)

国家資本主義

「もしもピョートル大帝がいま生きていたとしたら、彼は再びモスクワから遷都するだろう——ただし、今回はバルト海ではなく日本海に向けて」。ロシアの最重要地点、21世紀のフロンティアがアジア太平洋にあることを述べる際に、ウラジオストックへの遷都の検討を取り上げた一節であり、これなどは、ロシアのことをかじったことのある人にはわかりやすいフレーズで



チフヴィン墓地のチャイコフスキーの墓石。この墓地には
多くの有名な芸術家が眠る (サンクトペテルブルク)

あろう。

プーチン氏が本年3月に大統領に返り咲いた後、ロシアでは、エネルギー産業の中央集権化・国家支配と受け取れる政策が矢継ぎ早に繰り出された。また、前政権からの継承政策課題であった国営企業の民営化も後退が懸念されている。これらの動きは、国家資本主義と評され、欧米や日本等の先進国とたもとを分かち動きと批判されている。そして、ロシアの資源価格依存の経済体制が今後も変わらないことが懸念されている。

なぜ、ロシアはこうした路線を選択するに至ったのか？ これから一体どうしていくつもりなのか？ どうすべきなのか？「国家資本主義」のような現体制の現象面の描写はしばしば見かけるが、こうした本質的な問いかけに回答が得られる機会はそう多くはない。本書は、現代ロシアをソ連崩壊の原因までさかのぼり、崩壊後の状況を地政学、安全保障、経済、エネルギー、文化、イデオロギー、宗教、言語という多方面にわたり、経緯を詳細にたどり、場合によっては事象間の関係を結びつけ、上記のような問いかけに答えようとしている。

その論証のディテールだけでも読み応えは十分あり、興味深い題材が提供されている。NATO拡大からロシア戦争に至る経緯などは読者の関心をひきつけてやまない。ソ連崩壊後1990年代から2000年代初に



クレムリンのスパスカヤ塔。政府要人・外国賓客がリムジンで塔を通過して大統領府にたどり着く（モスクワ）

ドミトリー・トレーニン 著
河東哲夫・湯浅剛・小泉悠 訳
『ロシア新戦略
——ユーラシアの大変動を
読み解く——』

発行元◎作品社
発行年月◎2012年3月
総ページ数◎433ページ
価 格◎2940円（税込）



かけて、ロシアの政権は西側に飛び込み、西側と手を携えて統合を試みようとしたが、ロシアの指導層が結局国内外で保守的政策を選んでしまい、当時主導権を握っていた西側もロシアを仲間と認める意思が欠如していた結果、失敗に終わった。ここでは、原因をつくったのは、ロシアだけではなく西側にもあったことが指摘されている。

前途を切り開くために

プーチンの強力な指導力のおかげで国は安定し、油価高騰という幸運はあったが、ロシア経済は発展してきたではないか。民主主義や自由主義は万能ではなく、ロシアはロシアの進む道を模索していけばよいのではないか？ 小生は2年以上モスクワに駐在しているが、こうした意見は当地モスクワのビジネスマンからもしばしば聞かれる意見である。

しかし、著者はあえて険しい道を通らねばロシアの今後は周縁化に行き着くのみと警鐘を鳴らす。エネルギー依存型の経済、民主主義なき資本主義、これらはいずれも持続的ではない。先進的な技術を身につけ、イノベーションのための能力を構築せねば、ロシアは解体し始め、核兵器がロシアを救えなかったように、エネルギー資源もロシアを救えないだろう。変化をもたらすためには、自国の経済、学知、社会的潜在能力の強化を政府の最優先課題とし、まずは、法の支配や法の制度上の欠陥を解消して、西側と比肩できるまで仕上げなければならない。

小生は、ロシアの今に至る道を冷静に振り返りその必然をかみしめながら、なお現状にあきらめずロシアの前途を切り開くための処方せんを提供せんとする、著者の大胆かつ骨太の楽観主義に共感を覚える者である。